

『千載佳句』の資料的価値について

妹尾昌典

『千載佳句』の有する価値については、山田孝雄氏の解題（『珍書同好会叢書所収『千載佳句』・金子彦二郎氏の『平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇——』・高野辰之氏の『古文

学踏査』等に幾分は触れられているが、本稿に於いては、もう少し具体的に例をあげながら見ていきたいと思う。従来、研究者の多くは、『千載佳句』を引用する際に金子彦二郎氏の『平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇——』に収める帝国上野図書館蔵本を底本としたという校訂本を用いてきたが、この本を引用するには非常に慎重でなければならぬ。(注1)そこで本稿では、テクストとしては、いづれも近世の写本である松平文庫蔵本・内閣文庫蔵本（甲本）・（乙本）・国会図書館蔵本（旧帝国上野図書館蔵本）の四本を参照した。

但し、いかなる書物でも万全という事はないのであるから、公正を期するため、最初にその短所にも触れておくこととする。

なお、文献を引用する際に、小字を大字に改めたり、返り点を施

す等の便宜的な処置をしたことを断っておく。

一 作者名を誤ったもの

撰集には往々にしてみられることであるが、作者名を誤っているものがある。(注2)

A 『千載佳句』二十四番（四時部・早春）

千嶂雲消溪影綠、幾家梅綻酒波清。杜荀鶴

△酬湖州杜員外春至日見憶(注3)

右の句は次の詩の一節である。

『唐詩紀事』卷五十八（李郢）

△和湖州杜員外冬至日白蘋洲見憶

白蘋亭上一陽生、謝朓新裁錦繡成。

千嶂雲銷溪影綠、幾家梅綻海波清。

已知鷓鴣鳥長來狎、可許汀洲獨有名。

多愧龍門重招引、即拋田舎棹、舟行。

B 『千載佳句』二〇六番（四時部・暮秋）

鴻聲斷續暮天遠、柳影蕭疎秋日寒。李頎《送李太貶南陽》

右の句は、後に引くように錢起の作であるが、作者名を李頎と誤っている。この句は『新撰朗詠集』卷上（鷹）三〇一番にも収めるが、やはり作者名を誤る。

『錢考功集』卷八（四部叢刊・明銅活字本）

《送李九貶南陽》

玉柱金鸞醉不歡、雲山驛道向東看。

鴻聲斷續暮天遠、柳影蕭疎秋日寒。

霜降幽林、露蕙若、弦驚翰苑、失鴛鴦。

秋來廻首君門阻、馬上應歌行路難。

二 詩題を誤ったもの

C 『千載佳句』二七二番（天家部・風月）

城南歌吹琴臺月、江上旌旗錦水風。章孝標《蜀中上王尚書》

右の詩の詩題「蜀中上王尚書」は、次に引くように、「城南歌吹琴臺月、江上旌旗錦水風」の句とは全く別の詩の詩題を誤って記したものである。

『全唐詩』卷五〇六・章孝標

《蜀中上王尚書》

梓桐花暮碧雲浮、天許文星寄上頭。

武略劍峰環相府、詩情錦浪浴仙洲。

丁香風裏飛殘草、邛竹煙中動酒鉤。

自古名高閑不得、肯容王粲賦登樓。

『全唐詩』卷五〇六・章孝標

《上西川王尚書》

人人入蜀謁文翁、妍醜終須露鏡中。

詩景荒涼難道合、客情疎密分當同。

城南歌吹琴臺月、江上旌旗錦水風。

下客低頭來又去、暗堆冰炭在深衷。

D 『千載佳句』四〇三番（人事部・謝恩）

馬因廻顧雖增價、桐遇知音已半燠。白《除忠州寄崔相公》

右の詩の詩題「除忠州寄崔相公」は、次に引くように「馬因廻顧雖增價、桐遇知音已半燠」の句とは全く別の詩の題を誤って記したものである。

『白氏文集』卷十七（宋本）

《江西裴常侍以優禮見待又蒙贈詩輒叙鄙誠用伸感謝》

一從_レ簪_ヲ事_ニ金_貂、每借_レ温_顔放_レ折_腰。
 長覺身輕離_ニ泥_滓、忽驚手重捧_ニ瓊_瑤。
 馬因_ニ迴_顧雖_レ增_レ價、桐遇_ニ知音_ニ已_レ半_焦。
 他日乘_レ鈞如_レ見_レ念、壯心直氣未_ニ全_銷。

『白氏文集』卷十七（宋本）

△除_ニ忠州_ニ寄_ニ謝_崔相_公△

提拔出_レ泥知_ニ力_竭、吹噓生_レ翅見_ニ情_深。
 劍鋒_レ折_レ難_レ衝_レ斗、桐尾_レ燒_焦望_望琴。
 感_レ舊_レ兩_レ行_レ年_レ老_レ淚、酬_レ恩_レ一_レ寸_レ歲_レ寒_レ心。
 快州好惡何須_レ問、鳥得_レ辭_レ籠_レ不_レ擇_レ林。

これらは、見方を変えると、詩句を誤ったものとも言えなくない
 ようではあるが、『千載佳句』の体裁（すなわち他の朗詠系の書物
 にも往々して見られるように、詩句の内容によって部立て分類が
 されており、詩句の下に小さな字で補足的に作者名と詩題が注記さ
 れている形）からすると、やはり、あくまで詩句を主、詩題は従と
 考えるべきものであり、詩題のほうを誤ったものとして扱うべきで
 あろう。

三 本文の文字を誤ったもの

E 『千載佳句』十四番（四時部・早春）

水消見水多於地、雪霽看山盡入梅。白_△早春_△
 右の詩は、次に引く詩の第五・六句である。

『白氏文集』卷三十四（宋本）

△早春憶_レ遊_ニ思_黯南_莊因_ニ寄_ニ長_句△

南莊勝處心常憶、借問軒車早晚遊。
 美景難_レ忘_レ竹_廊下、好風爭_レ奈_レ柳_橋頭。
 冰消見_レ水多_ニ於_レ地、雪霽看_レ山盡_レ入_レ樓。
 若待_ニ春_深始_レ同_レ賞、鶯殘_レ花_落却_レ堪_レ愁。

「雪霽看山盡入梅」の「梅」は「樓」との字形の類似から生じた
 誤写であろう。「入樓」は、ここでは、『三体詩』（五律・四虚）に
 収める顧況△洛陽早春△「客路偏逢雨、鄉山不入樓」などと同様に
 「楼上からの眺望に入る」という意であろう。なお、この句は『和
 漢朗詠集』三八七番（冬・氷）にも引かれているが、「雪霽望山盡
 入樓」となっており、『千載佳句』よりもむしろ正しく「樓」の字
 を伝えている。しかし一方で『和漢朗詠集』の古写本のなかでは、
 「望」を「看」としているものは、『校異和漢朗詠集』（大学堂）三
 九〇番によると岩瀬文庫所蔵弘安本のみであり、「看」と「望」は
 現代人の感覚では意味は似ているように思えるものの、たとえば
 『類聚名義抄』に二字に共通する訓が見いだせないことなどを考慮
 に入れば、『千載佳句』が『和漢朗詠集』の直接の原拠となつて
 いるというような説は、なお一考の余地があると言えよう。

F 『千載佳句』(四時部・秋興) 一八三番

兼霞曙色蒼々遠、蟋蟀秋聲處々聞。皇甫公

△使至壽州寄劉長卿△

右の句は次の詩の第三・四句である。

『唐皇甫冉詩集』(四部叢刊三編集部)

△使往壽州淮路寄劉長卿△

榛草荒涼村落空、驅馳卒歲亦何功。

兼霞曙色蒼々遠、蟋蟀秋聲處處同。

鄉路遙知淮浦外、故人多在楚雲東。

日夕煙霜那可道、壽陽西去水無窮。

右の詩は「空・功・同・東・窮」と(上平、一、東韻)で押韻しており、「同」の字を『千載佳句』は「聞」の字に作るが、「聞」の韻は(上平、二十、文韻)であり、押韻しない。字形の類似により「同」を「聞」と誤ったものであろう。

G 『千載佳句』(人事部・閑適) 四七七番

夜靜檻前調綠綺、日高窓下戴烏紗。道彦△倉居自遣△

右の句の「烏紗」は『全唐詩逸』卷中・道彦の項に「夜靜檻前調綠綺」、日高窓下戴烏紗。△倉居自遣△と見えるように、官吏のかぶる烏紗帽のことであるから「烏紗」とするのがよい。草体ではイトヘンとサンズイとは紛れやすいため「紗」を「沙」と誤

ったものであろう。

H 『千載佳句』(人事部・王昭君) 四四九番

一雙淚滴黃河水、願得東流入漢宮。陳潤△送王昭君△

右の句は次の詩の第三・四句である。

『宋本樂府詩集』卷二十九・吟歌曲・王偃

△明君詞△

北望單于日半斜、明君馬上泣胡沙。

一雙淚滴黃河水、願得東流入漢家。

『千載佳句』のように「宮」(上平、一、東韻)では「斜」「沙」(下平、九、麻韻)と押韻しないので「家」(下平、九、麻韻)の誤りであることが知られる。詩題の「送王昭君」というのも、「送(人物)」という場合は、知人が旅に出たり、赴任したり、帰郷したりするのを見送るというのが普通であって、この詩のように時代のかげはなれた歴史上の人物を見送るといふような言い方には無理がある。とすれば、これは詩題を誤った例でもある。この詩の作者および其の時代については拙稿『千載佳句』出典改正(『成城国文学』第九号)を参照されたい。

次に『千載佳句』の長所について触れることとする。

四 通行本の闕を補うところがある

I 『白氏文集』卷十六（宋本）

△題元八溪居▽

溪風漠漠樹重重、水檻山窓次第逢。

晚葉尚開紅躑躅、秋房初結白芙蓉。

聲來枕上千年鶴、影落杯中五老峯。

更媿殷勤留客意、魚鮮飯細酒香濃。

右の詩題について、明治書院の新釈漢文大系『白氏文集』（底本は那波本）の解題には

廬山の溪谷にある元八の住居に題した詩である。元八は名は宗簡、字は居敬。廬山の東南、五老峰のふもとに居を構えた。

『白氏文集』卷七「題元十八溪亭」詩（十は誤り、〇三〇二）の題下注に「亭は廬山の東南五老峰下に在り」とある。

と記しているが、朱金城氏の『白居易集箋校』の「箋」には次のようにある。

廬山志卷九：『唐元集虛、河南人。貞元、元和間避地來廬山、居相辭澗。白樂天在江州時常與往來、隱居今不知處。』城按：相辭澗在石牛山南。廬山志所載是也。元八宗簡此時在長安。據此詩

「影落杯中五老峯、更媿殷勤留客意」等句、其人必居廬山、顯非

在長安之元八宗簡。又據白氏題元十八溪亭（卷七）、兩夜贈元十八（本卷）、草堂記（卷四三）、遊大林寺序（卷四三）等作及韓愈贈別元十八協律詩、可知「元八」必爲「元十八」之訛。各本「元」下俱脫「十」字。

つまり、完全に説が対立している。ただ、新釈漢文大系のほうでは、根拠が示されていないのに対して、『白居易集箋校』のほうでは、この詩が元和十年（八一六）、すなわち白居易が江州司馬の任にあった時の作であることをふまえたうえで、元宗簡は此の時には長安にいたのであるから、詩の内容とも符合せず、「元八」は誤りであるという根拠が示されている。

いったい、このように説がわかれているその原因は、現存の『白氏文集』の詩題に、いずれも「題元八溪居」とあり、「題元十八溪居」としたものが見あたらないところにある。けれども『千載佳句』には、一四九番（四時部・早秋）「晚葉尚開紅躑躅、秋房初結白芙蓉。白△題元十八溪居▽」、九九三番（隱逸部・山居）「聲來枕上千年鶴、影落盃中五老峯。白△題元十八溪居▽」、と、二箇所にわたって此の詩が引かれており、いずれも詩題の部分には「元八」ではなく「元十八」となっている。すなわち、これは、『白氏文集』には、もと「題元十八溪居」とあったものが、のちに「十」の字を脱して現存の『白氏文集』のような「題元八溪居」という詩題に到ったという朱金城氏の説を別の面から裏付けているものであり、通行本の闕を補うものと言えよう。このことは、『千載佳句』が唐人

の詩集の古抄本にも準ずる高い資料的価値をもっていることの一証である。新釈漢文大系の余説に、せつかく『千載佳句』の本文を引きながらも、詩題のほうは引かず、かつそのことに全く言及していないのは惜しまれる。

五 通行本の語順を正すところがある

J 『白氏文集』卷二十六(宋本)

△送_三東都留守令狐尚書赴_二任_一△

翠華黃屋未_二東巡_一、碧洛青嵩付_二大臣_一。

地稱_三高情_二多_一水竹、山宜_三閑望_二少_一風塵。

龍門即擬爲_三遊客_二、金谷先憑作_三主人_一。

歌酒家家花處處、莫_三空管_二領上陽春_一。

右の詩の詩題「送東都留守令狐尚書赴任」は、『白氏文集』に見える他の詩題、すなわち、卷二十六「送_三河南尹憑學士赴_二任_一」・同「送_三陝州王司馬建赴_二任_一」・卷三十一「送_三姚杭州赴_二任_一」・因思_三舊遊_二一首_一・卷三十五「送_三唐州崔使君侍親赴_二任_一」等と比較しても、特に語法的に問題はないようであるが、『千載佳句』四十二番(四時部・春興)に「歌酒家々花處々、莫空管領上陽春。白△送令狐尚書赴東都留守△」とあり、詩題の語順が異なっている。『千載佳句』の詩題は一方で『文苑英華』卷二七八に引く此の詩の詩題と完全に一致している。そして次に引く劉禹錫や張籍の詩の詩題とを比較し

てみるならば、(特に張籍の詩と詩題が完全に一致していることは注目に値するものであるし)、通行の『白氏文集』よりも『千載佳句』の詩題のほうに唐代の旧を伝えていることは一目瞭然であろう。

『劉夢得文集』外集卷一(四部叢刊・影宋本)

△同_三樂天送_二令狐相公赴_一東都留守(自_三戶部尚書拜_一)△

尚書劍履出_三明光_二、居守旌旗起_三洛陽_一。

世上功名兼_三將相_二、人間聲價是_三文章_一。

衙門曉闕分_三天仗_二、賓幕初開辟_三省郎_一。

從_三發_二坡頭_一向_三東望_二、春風處處有_三甘棠_一。

(自_三華陝_二至_一河南_三皆_二故林也_一)

『張司業詩集』卷四(四部叢刊・明刊本)

△送_三令狐尚書赴_二東都留守_一△

朝廷重寄在_三關東_二、共說從來選_三上公_一。

勳業新成_三大梁鎮_二、思洛更守_三洛陽宮_一。

行香暫出_三天橋上_二、巡禮常過_三禁殿中_一。

每領群臣拜_三章慶_二、半開門仗日_三曠曠_一。

六 通行本の本文の誤りを正すところがある

K 『白氏文集』卷十七(宋本)

△別_三草堂_二三絕句_一△其一

久眠褐被爲「居士」、忽挂褙袍「作使君」。
身出「草堂」心不出、廬山未要動「移文」。

右の詩の第三・第四句は『千載佳句』一〇〇八番にも見え、第四句の「動」の字については、平岡武夫氏らの校訂本『白氏文集』（京都大学人文科学研究所）^(注4)においても「動（馬本）（全唐詩本）作勅」と異同を示す以外は特に言及がないが、朱金城氏『白居易集箋校』の「校」には次のようにある。

〔動移文〕「勅」、馬本、全詩俱作「勅」。汪本注云：「一作『勅』」。全詩注云：「一作『勅』」。城案：何校云：「十四卷中有『南山莫勅北山文』之句，作『勑』字爲是。」則「勑」當作「勑」，據宋本、那波本、萬首、何校改。^(注5)

つまり、ここでは一方で『白氏文集』の別の部分の表現が類似している本文、もう一方で異本に見える同じ部分の異文を根拠に「勑」の字を「勑」の字に改めているのである。

しかし、私は、この詩の「勑」の字を「勑」の字に改めたことについては、うけいれがたいと愚考する。その理由は後に述べるが、いまは何焯・朱金城の両氏が問題の「勑」の字を「勑」の字に改める根拠となった『白氏文集』の別の部分の本文を見てみよう。

L 『白氏文集』卷十四（宋本）

△和「錢員外青龍寺上方望「舊山」
舊峯松雪舊溪雲、悵望今朝遙屬君。
共道使臣非「俗吏」、南山莫勑北山文。

右に引いた詩の第四句の「南山莫勑北山文」については、（那波本）（馬元調本）（汪立名本）および『全唐詩』ともに異同がなく、この巻は『白氏文集』のしかるべき古抄本が残っていないために平岡武夫氏らの校訂本『白氏文集』にも取り上げられていない。

しかし、『千載佳句』三五七番（人事部、近臣）には「共道使臣非俗吏、南山莫勑北山文。白△和錢員外青龍寺上方望山舊詩發句云、舊峯松雪舊溪雲、悵望今朝遙屬君△」とあり、「勑」の字が「勑」の字となっていることが注目される。

金子彦二郎氏は通行本^(注6)によって『千載佳句』の「勑」の字を「勑」の字に校訂しておられるが、ここでは、むしろ『千載佳句』によって現存の『白氏文集』の本文の誤りを正すべきところであろうと思われる。

いったい、「南山莫勑北山文」は、『文選』卷四十三などに収めるところの孔徳璋△北山移文△を念頭において詠まれたものであり、その中に見える「鍾山之英、草堂之靈、馳煙驛路、勑移山庭」（鍾山の英、草堂の靈、煙を驛路に馳せ、移を山庭に勑む）という部分の「勑」（きざむ）の字をうけた表現なのである。そのため、次に引くように△北山移文△をふまえた作品には「勑」の字も使われることが多いのである。

『杜少陵集詳註』卷二十

▲單山人隱居▼

南極老人自有星、北山移文誰勒銘。

徵君已去獨松菊、哀壑無光留戶庭。

子見亂離不得已、子知出處必須經。

高車駟馬帶傾覆、悵望秋天虛翠屏。

『全唐詩』卷三〇六・朱灣

▲假攝池州留別東溪隱居▼

一官仍是假、豈願數離羣。

愁鬢看如雪、浮名認是雲。

暫辭南國隱、莫勒北山文。

今後松溪月、還應夢見君。

『全唐詩』卷六四〇・曹唐

▲三年冬大禮五首▼其五

太和琴暖發南薰、水澗風高得細聞。

滄海擊歌慶是相、歷山迴禪舜爲君。

翠微呼處生丹障、清淨封中起白雲。

今日病身慙小隱、欲將泉石勒移文。

右に引いたうち、特に朱灣の「莫勒北山文」は『千載佳句』に引

く白居易の「南山莫勒北山文」と部分的に完全に一致する。現在通行の『白氏文集』の「南山莫勒北山文」も、おそらく、もとは『千載佳句』に見えるように「南山莫勒北山文」とあったもので、いつしか字形の近似によって「勒」の字を「動」の字に誤るにいたったものであらう。

『白氏文集』卷十四▲和錢員外青龍寺上方望舊山▼「共道使臣非俗吏、南山莫勒北山文」は、「共に言おう、我々は歴とした刺史であり、いやしい役人ではないのだから、終南山の英靈たちよ、(初めは隠棲しておりながら節を曲げて官途に就いた周顒を、かの孔徳璋が卑しんでものしたという北山移文のように、私に二度と山への立ち入りを許さぬという) 移文を、終南山には勒まないでくれ、と」の意、すなわち、意訳すれば「終南山の英靈よ、我々がいつまでも官吏をやめきれずにいることを非難しないでおくれ」との意であらう。

以上の結果をふまえれば、前に触れた『白氏文集』卷十七▲別草堂三絶句▼其二「身出草堂心不出、廬山未要動移文」における「動」の字も、私の考えでは、何焯・朱金城の両氏とは正反対に、やはり「勒」とすべきであり、このところは、『白氏文集』諸本のうちでも善本とされている(金沢本)よりも、現在ではあまり善本とはされていない(馬本)が、かえって『白氏文集』の古い字をどめていたものと考ええる。さすれば、「身出草堂心不出、廬山未要勒移文」は、「この身は出かけるが心はここに留まるから、(心まで官に

つながられてしまわわけではないのだから) 廬山の草堂の英靈よ、ただ私に山に二度と立ち入ることを許すまいとして移文を勒むには及ばないよ」との意であろう。《北山移文》に「鍾山之英、草堂之靈、馳煙驛路、勒移山庭」とあるのであるから、ごく常識的に考えてみれば、北山草堂の英靈が移文を勒む能力があるとすれば、南山や廬山草堂の英靈にも北山の移文と同様の移文を勒む能力があつてしかるべきであろう。

実は『白氏文集』には、別にもう一箇所、類似の表現がある。すなわち、次に引く詩の第四句(結句)である。

M 『白氏文集』卷十三(宋本)

《祕書省中憶舊山》

厭從薄宦校青簡、悔別故山思白雲。

猶喜蘭臺非傲吏、歸時應免勒移文。

右の「歸時應免勒移文」の「勒」の字は(那波本)(馬本)(注本)(全唐詩本)に異同がないが、これも、おそらく、古くは「勒」の字であつたものが何時しか「動」の字に誤られるにいたつたものであろう。「猶喜蘭臺非傲吏、歸時應免勒移文」は、「このように意に添わぬ官吏生活であるが) そんな中でもやはりせめてもの喜ぶべきことは、中書省の役人は傲慢な役人ではないから、故山に帰つた時にも、きつと二度と山に立ち入るのを許さぬという移文を故山

の英靈に勒まれることだけは免れるであろうということだ」との意であろう。

いままで見てきたように、「千載佳句」には唐代のテクストの古い姿を留めていると思われる部分が少なからず存在しており、唐詩を研究する上できわめて高い資料的価値を有していることが確認できたかと思う。

注

(1) この校訂本の底本は、実は珍書同好会叢書所収の『千載佳句』であり、厳密な意味では帝國上野図書館蔵本を底本としたと言いがたい。謄写版にして珍書同好会叢書に収めるために帝國上野図書館蔵本を書写する必要が生じたわけであるが、その際にかんりの誤写が生じた。金子彦二郎氏の校訂本は、珍書同好会叢書を底本とし、その原本である帝國上野図書館蔵本を直接の底本とはしなかつたために、珍書同好会叢書の誤写を継承してしまっている。その顯著な例をあげれば、五十三番(四時部・春興)「林家着雨燕脂落、水行牽風翠帶長。杜甫《曲江遇雨》」の「林家」は「林花」の誤写であり、七十九番(四時部・春曉)「竹夢曉籠銜鎖月、蕪風暖送過江春。白《東樓曉望》」の「竹夢」は「竹霧」の誤写であり、九十七番(四時部・暮春)「兩岸楊花風作雪、一池荷葉雨作珠。陳潤《題山陰朱徵君隱居》」の「雨作珠」は「雨成珠」の誤写である。

(2) たとえば柳澤良一氏「近世の朗詠集に見られる散逸句」(北陸古典研究会『北陸古典研究』創刊号)において、『統撰和漢朗詠集』に作者名を「奇名」として収載されている「曾隨織女渡天河、記得雲間第一歌」の句は、実際には、『才調集』卷五・『文苑英華』卷二二三

・『三体詩』七絶虚接・『劉賓客文集』卷二十五(畿輔雜書)・『劉夢得文集』卷五(四部叢刊)などにも収載されている△聽・舊宮中樂人穆氏唱歌▽「曾隨織女渡天河、記得雲間第一歌。休唱貞元供奉曲、當時(文苑英華)作如今」朝士已無多」の一節で、劉禹錫の作であり、散逸句ではない。

(3) 詩題中の「春至日」は「冬至日」の誤り。『唐詩紀事』・『唐詩類苑』卷二十三・『全唐詩』卷五九〇・『古今圖書集成』卷八十九および『樊川詩集注』卷三△湖南正初招李郢秀才▽の馮集梧の注に引く李郢の詩に△和湖州杜員外冬至日白蘋洲見憶▽に作る。李郢の詩の第一句に「白蘋亭上一陽生」とあり、『周易』△復▽「后は方を省みず」、唐の孔穎達疏に「冬至に一陽生ず、是れ陽動きて陰復た静まるなり」とあるから「冬至日」とあるのがよい。「春」の字と「冬」の字については、『礼記』△月令▽「立春之日、東風解凍」の「春」の字を、汪紹楹校・上海古籍出版社刊『藝文類聚』卷一△風▽に「礼記曰、立冬之日、東風解凍」と、「冬」の字に誤った例がある。

(4) 名著普及会『名著サブリメント』(一九九〇年八月号)の林望氏と太田次男氏との対談「思想と文獻のあはひ」に、「京都大学で、神田喜一郎先生が戦後台湾から帰ってこられたわけですね。そこで、人文研で神田先生を中心に本を読もうという話になり、白氏をしたんです。だから、神田先生が解釈されたものの原稿がちよっと残っているんだけれども、そこで、平岡武夫さんとか、花房英樹さんがやったわけです」という太田氏の談話がある。

(5) 「馬本」は明の万曆三十四年に馬元調が刊行した『白氏長慶集』(全詩)は清の康熙四十六年揚州詩局刊行の『全唐詩』「萬首」は明の嘉靖年間に刊行された『萬首唐人絶句』、「何校」は北京図書館に蔵する何焯が校訂した一隅草堂刊本『白香山詩集』を何者かが臨書したものを指す。

(6) 金子彦二郎氏の言う通行本とは立野春節校和刻本『白氏文集』を指す。

(7) 漢籍の校勘に関しては、『周祖謨語言文史論集』卷八「論校勘古書的方法」(古籍校勘述例)(浙江古籍出版社)、黄典誠著『訓詁学概論』(循校勘的途径)(福建人民出版社)などが参考になる。また、作品は異なるが、小松英雄著「やまとた」——古今和歌集の言語ゲーム——の「作品ごとに事情は異なるが、あらゆる点で他の諸伝本よりすぐれたテキストは存在しない。どの伝本でも利用のしかたしだいで適切に生かすことが可能であるし、善本とみなされていられるものも、そのように評価する基準が徹底的に再検討されなければならない」(講談社、三五八頁)という指摘は示唆的である。

(補記) Kに引いた詩に関して、清の大儒盧文弨の抱經堂叢書に収める羣書拾補の『白氏文集』校正に於いても、「廬山未要勸(勸)遺文」と「勸」の字を「勸」の字に校訂してしまっている。「勸」「勸」ともに仄声であるから「勸」のままで平仄についても問題はなく、「勸」のほうがより典拠に忠実であり、意味も十分通じること、前に述べた通りである。なお、「移」の字を「遺」の字に作るが、その理由は未詳。

(成城大学大学院博士課程後期修了)